

## Bloch functions and harmonic BMO functions on the unit ball

早大理工 村本克志 (Katsushi Muramoto)

### 1. 序

単位円板上の解析函数に対する Bloch norm と BMO norm の同値性は Coifman, Rochberg and Weiss [3] によつて得られた。本稿の目的はこの結果を、確率論の手法を用いて、多次元に拡張することである。

$n$  次元ユークリッド空間上の単位円板を  $D_n$  とし、 $D_n$  上の実調和函数の空間を  $H(D_n)$  と表す ( $n \geq 2$ )。  $H(D_n)$  に属する函数  $R$  が

$$\|R\|_{H,n} = \sup_{x \in D_n} \frac{1}{2} (1 - |x|^2) |\nabla R(x)| < \infty$$

を満たすとき、調和 Bloch 函数と呼ばれる。こゝで、 $|\nabla R(x)| = \left\{ \sum_{i=1}^n \left( \frac{\partial R(x)}{\partial x_i} \right)^2 \right\}^{1/2}$  である。調和 Bloch 函数の空間を  $B_H(D_n)$  と表す。

$p \geq 1$  とする。  $H(D_n)$  に属する函数  $R$  が

$$\|R\|_{p,n} = \sup \left\{ \frac{1}{|B|} \int_B |R(x) - R(b)|^p dx \right\}^{1/p} < \infty$$

$B = \text{ball in } D_n$

を満たすとき, 調和  $BMO_p$  函数と呼ばれる。ここで,  $b$  は  $B$  の中心,  $|B| = \int_B dx$  を表す。調和  $BMO_p$  函数の空間を  $BMOH_p(D_n)$  で表す。

空間  $B_H(D_n)$ ,  $BMOH_p(D_n)$  は Banach 空間 (modulo constant) をなす。各  $p \geq 1$  に対して, norm  $\|\cdot\|_{H,n}$ ,  $\|\cdot\|_{p,n}$  の同値性が得られる。実際, 次の定理が成立する。

定理  $R \in H(D_n)$  とする。  $p$  と  $n$  にのみ依存する正の定数  $C(p,n)$  が存在して次の不等式が成立する。

$$(1.1) \quad \frac{1}{C(p,n)} \|R\|_{p,n} \leq \|R\|_{H,n} \leq C(p,n) \|R\|_{p,n}$$

特に,  $p=2$  の場合, 次の不等式が成立する。

$$(1.2) \quad \frac{1}{\sqrt{n}} \|R\|_{2,n} \leq \|R\|_{H,n} \leq \sqrt{n(n+2)} \|R\|_{2,n}$$

上の定理で  $n=2$  の場合は, 本質的に Coifmann, Rochberg

and Weiss [3], Gotoh [6] に述べられている。

## 2. 定理の証明

John-Nirenberg の不等式により, (1.1) は (1.2) から得られる。そこで (1.2) だけを示す。

(1.2) の左辺を示すため, 2つの補題を用意する。

補題1. ball  $B$  の中心  $b$ , 半径  $a$  ( $0 < a < 1$ ),  $B \subset D_n$  とする。写像  $T \in T(x) = ax + b$  によって定めるとき, 次式が成立する。

$$a \leq (1 - |T(x)|^2) / (1 - |x|^2) \quad (x \in D_n)$$

(補題1の証明) 直接計算に依る。□

$(B_+)$  を原点から出発する  $n$  次元ブラウン運動とし, 停止時間  $T(r) \in \inf \{t > 0; |B_+| \geq r\}$  によって定める。伊藤の公式により次の補題を得る。

補題2.  $0 < r < 1$  とする。次の不等式が成立する。

$$E \left[ \int_0^{T(r)} \frac{d\alpha}{(1-|B_\alpha|^2)^2} \right] \leq \frac{1}{2} \log \frac{1}{1-r^2}$$

ここで、 $E[\ ]$  は確率測度による平均を表す。

(補題2の証明)  $x \in D_n$  に対して  $g(x) = \frac{1}{2} \log \frac{1}{1-|x|^2}$  とする。

このとき、

$$\Delta g(x) = \frac{n - (n-2)|x|^2}{(1-|x|^2)^2} \geq \frac{2}{(1-|x|^2)^2}.$$

伊藤の公式により、次の式を得る。

$$E \left[ \int_0^{T(r)} \frac{d\alpha}{(1-|B_\alpha|^2)^2} \right]$$

$$\leq E \left[ \int_0^{T(r)} \frac{1}{2} \Delta g(B_\alpha) d\alpha \right] = E[g(B_{T(r)})] = \frac{1}{2} \log \frac{1}{1-r^2}.$$

以上から補題の結果が得られた。□

$n \geq 2$  とし、 $n$  は固定する。簡単に、 $\| \cdot \|_{H,n}$  を  $\| \cdot \|_H$  と、また、 $\| \cdot \|_{p,n}$  を  $\| \cdot \|_p$  と表す。同様に、 $D_n \in D$  と表し、 $\partial D$  を  $D$  の境界を表す。

以上の準備の下で(1.2)の左側不等式の証明にとりかかる。

まず, 補題 1 に より, 次を示せば十分である.

$$(2.1) \quad \frac{1}{|D|} \int_D |R(x) - R(0)|^2 dx \leq n \|R\|_H^2.$$

$d\pi$  を normalized Lebesgue 測度とする. 極座標表示により

$$(2.2) \quad \begin{aligned} & \frac{1}{|D|} \int_D |R(x) - R(0)|^2 dx \\ &= n \int_0^1 \int_{\partial D} |R(rx) - R(0)|^2 d\pi(x) r^{n-1} dr. \end{aligned}$$

$B_{T(r)}$  は  $\{|x|=r\}$  上に一様に分布するので, 伊藤の公式, 補題 2 に より

$$(2.3) \quad \begin{aligned} & \int_{\partial D} |R(rx) - R(0)|^2 d\pi(x) \\ &= E[|R(B_{T(r)}) - R(B_0)|^2] \\ &= E\left[\int_0^{T(r)} |\nabla R(B_s)|^2 ds\right] \\ &\leq \|R\|_H^2 E\left[\int_0^{T(r)} \frac{4 ds}{(1-|B_s|^2)^2}\right] \end{aligned}$$

$$\leq 2 \|R\|_H^2 \log \frac{1}{1-r^2}.$$

また, 直接計算により,

$$(2.4) \quad \int_0^1 (\log \frac{1}{1-r^2}) r^{n-1} dr \leq \int_0^1 (\log \frac{1}{1-r^2}) r dr = \frac{1}{2}.$$

(2.2), (2.3), (2.4) から

$$\begin{aligned} & \frac{1}{|D|} \int_D |R(x) - R(0)|^2 dx \\ & \leq 2n \|R\|_H^2 \int_0^1 (\log \frac{1}{1-r^2}) r^{n-1} dr \\ & \leq n \|R\|_H^2. \end{aligned}$$

上式は (2.1) が成立すること, 即ち, (1.2) の左側不等式の成立を示す。

(1.2) の右側不等式を示すために, 次の補題を用意する。

補題 3.  $f$  を  $\bar{D}$  上の連続関数とする。  $f$  が  $D$  上の調和函数であるとき, 次の不等式が成立する。

$$|\nabla f(0)|^2 \leq n^2 \int_{\partial D} |f(y)|^2 d\pi(y).$$

(補題 3 の証明)  $R_y(x) = \frac{1-|x|^2}{|x-y|^n}$  とする. Durrett ([5], p.36) に依ると

$$f(x) = \int_{\partial D} R_y(x) f(y) d\pi(y).$$

これより次の不等式を得る.

$$(2.5) \quad |\nabla f(x)|^2 \leq \int_{\partial D} |\nabla R_y(x)|^2 |f(y)|^2 d\pi(y).$$

一方, 簡単な計算から,

$$(2.6) \quad |\nabla R_y(0)|^2 = \frac{n^2}{|y|^{2n+2}}.$$

(2.5), (2.6) により

$$|\nabla f(0)|^2 \leq n^2 \int_{\partial D} \frac{1}{|y|^{2n+2}} |f(y)|^2 d\pi(y)$$

$$\leq n^2 \int_{\partial D} |f(y)|^2 d\pi(y).$$

よって補題の結果が得られた。□

これから(1.2)の右側不等式の証明にとりかかろう。Bを中心b, 半径 $1-|b|$ のD内のballとする。  $0 < r < 1-|b|$  に対し、  $T_r(x) = rx + b$  とおく。このとき極座標表示により

$$(2.7) \quad \frac{1}{|B|} \int_B |R(x) - R(b)|^2 dx \\ = \frac{1}{(1-|b|)^n} \int_0^{1-|b|} \int_{\partial D} |R(T_r(x)) - R(T_r(0))|^2 d\pi(x) r^{n-1} dr.$$

一方, 補題3により

$$(2.8) \quad \int_{\partial D} |R(T_r(x)) - R(T_r(0))|^2 d\pi(x) r^{n-1} dr \\ \geq \frac{1}{n^2} |\nabla R \circ T_r(0)|^2 = \frac{r^2}{n^2} |\nabla R(b)|^2.$$

(2.7), (2.8) により次を得る。

$$\frac{1}{|B|} \int_B |R(x) - R(b)|^2 dx \\ \geq \frac{|\nabla R(b)|^2}{n(1-|b|)^n} \int_0^{1-|b|} r^{n+1} dr$$



$$\geq \frac{1}{n(n+2)} |\nabla R(b)|^2 (1-|b|)^2$$

$$\geq \frac{1}{n(n+2)} \left\{ \frac{1}{2} (1-|b|^2) |\nabla R(b)| \right\}^2.$$

上式は(1.2)の右側不等式の成立を示す。以上から定理の証明が得られた。

### 3. 注意

不等式(1.1)は Burkholder - Davis - Gundy 不等式を使うことにより直接証明することができず。

定理の結果は、 $n$ 次元複素平面上の円板  $\{z \in \mathbb{C}^n; |z| < 1\}$  においても成立する。ただし、このときは円板上の解析関数  $f$  に対し Bloch norm  $\|f\|_A$  は次のように定義される。

$$\|f\|_A = \sup_{|z| < 1} (1-|z|^2) |\nabla_z f|,$$

ここで  $\nabla_z f = \left( \frac{\partial f}{\partial z_1}(z), \dots, \frac{\partial f}{\partial z_n}(z) \right)$  である。

## 参考文献

- [1] S. Axler, The Bergman spaces, the Bloch space, and commutators of multiplication, *Duke Math. J.* 53 (1986), 315 - 332.
- [2] A. Bearnstein II, Analytic functions of bounded mean oscillation, *Aspect of contemporary complex analysis*, Academic Press (1980), 3-36.
- [3] R.R. Coifman, R. Rochberg and G. Weiss, Factorization theorems for Hardy spaces in several complex variables, *Ann. of Math.* 103 (1976), 611-635.
- [4] C. Dellacherie and P. A. Meyer, *Probabilites et potential, Theorie des martingales*, Hermann, Paris, 1980.
- [5] R. Durrett, *Brownian motion and martingales in analysis*, Wadsworth, Belmont, California, 1984.

- [6] Y. Gotoh, On BMO functions on Riemann surfaces,  
J. Math. Kyoto Univ. 25 (1985), 331-339.